

軽度アルツハイマー型認知症への認知リハビリテーションの効果判定(平成18年度心理科学研究科修士学位論文要旨)

著者名(日)	森 朋子
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要 : J Psychol Sci
巻	2
ページ	160
発行年	2006
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006829/

軽度アルツハイマー型認知症への認知リハビリテーションの効果判定

森 朋子

〈目的〉

アルツハイマー型認知症(Alzheimer-type dementia: AD)患者に対して、個々の認知リハビリテーション(認知リハ)では課題が出来るようになり、効果がある。その課題を組み合わせることで実施し、認知リハの効果検証を行なうことが本研究の目的である。効果検証のために、抗認知症薬の治験に用いられる評価尺度を準用した。

〈方法〉

対象者は、在宅通院中でDSM-IV-TR診断基準を満たす軽度から中等度(MMSE16-20点)のAD患者10名とその主たる介護者であった。塩酸ドネペジル投与中の9名は、薬効のピークを過ぎた12週以降に参加した。研究デザインは、同一患者に治療法A, Bの両方を交替して行なうクロスオーバーデザインを用いた。認知リハは個々の課題訓練では効果が確認されているが、認知機能全体への効果は立証されていない。そのため認知リハだけの介入群と統制群としての非介入群の2群を使うことは倫理上問題があると考え、非特異的介入を全症例で行なった。内容は、認知リハ介入(顔-名前連合訓練、積木課題、紐通し課題)と非特異的介入(非構造的会話)を週1回1時間、5回ずつ行なった。各々の介入を認知リハ群、非特異群とした。評価尺度としては、患者の認知機能評価はADAS-J. cog. とMMSE, 日常生活動作(ADL)評価はDAD, 介護者の介護負担感はJ-ZBI_8を用いた。

〈結果〉

認知リハ群と非特異群の2群間比較では、いずれの評価尺度も有意差を認めなかった。認知リハ介入前後の比較では、ADAS-J. cog. とDADにおいて有意な改善が認められた。非特異的介入前後ではいずれも有意差を認めなかった。

〈考察〉

本研究において、5週間の短期介入でADAS-J. cogは、2群間では有意差が認められず、有意な傾向にとどまったため効果を明言できない。しかし、本研究のADAS-J. cogの平均変化量-2.2点は、日本での塩酸ドネペジル研究の平均変化量4週間後-1.2点、8週間後-2.3点と同程度であった。薬物療法と認知リハを併用の効果が報告されており、本研究結果も両者の併用に関するのではないと思われる。したがって、課題を含まない検査で認知リハ介入後にADAS-J. cogとDADで有意な改善が見られたことは、認知リハによって認知機能およびADLの維持・改善の可能性が示唆されたと考えられる。

〈主な文献〉

- De Vreese, L. P., Neri, M., Fioravanti, M., Belloi, L., & Zanetti, O. (2001). Memory rehabilitation in Alzheimer's disease: A review of progress. *International Journal of Geriatric Psychiatry*, 16, 794-809.
- Homma, A., Takeda, M., Imai, Y., Udaka, F., Hasegawa, K., Kameyama, A., & Nishimura, T. (2000). Clinical Efficacy and Safety of Donepezil on Cognitive and Global Function in Patient with Alzheimer's Disease - A 24 Week, Multicenter, Double-Blind, Placebo-Controlled Study in Japan: *Dementia and Geriatric Cognitive Disorders*, 11, 299-313.